

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	三好 志尚
論文題目	中近世における港湾と都市の空間構造研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本学位申請論文は、中近世日本の港町（港湾都市）を対象に、文献史料・古地図等に基づいた個別具体的な景観復原をふまえて、当該期の流通経済・政治・社会の推移の中で、港町の空間構造の形成と変化を考察した研究である。</p> <p>第1章では、中近世日本の港町に関する先行研究の展望を行い、本研究の課題を明確化する。中近世の日本都市史研究においては、歴史学の議論が先行し、経済都市としての港町の社会的特徴が盛んに論じられる反面、その空間的特徴の検討は不十分であった。一方で、当該期港町の空間研究においては、港湾を都市空間の一構成要素として単純化する、あるいは個別の船着場・荷揚場に限った断片的な考察にとどまるなど、港湾空間の検討が不十分な点に課題があった。このような研究史整理に基づいて、本研究は、市場や問屋、造船所、蔵などの様々な施設の集積地として港湾を捉え、中近世港町の空間構造を、港湾を構成する諸機能が変化するプロセスとの関係において論じるものである。なお、本研究は、このような港湾と町場の関係史の視点に立つために、両者を包摂する城下町も対象となる。</p> <p>第2章は、中世島津氏の城下町であった鹿児島を対象とする事例研究である。城下町の空間形態を、南北朝期、室町期、戦国期に時期区分して復原し、島津氏の城下町建設と港湾との関係を考察する。土砂堆積が進行する河川の河口一帯において、対外貿易港としての機能の維持が難しくなると、島津氏は船着場に適した別の場所に港湾を移転させた。この港湾の移転は、城下町の形成や拡大と連動するものではなかった。港湾の近くに、城下町の流通拠点としての大規模な町場が発達することもなかった。このように中世鹿児島では、港湾と城下町のそれぞれの空間が、異なる文脈のもとで形成され、変化したことを明らかにする。</p> <p>第3章では、瀬戸内海の有力な港町である近世尾道の景観復原を行い、流通経済の進展によって、港湾と町場の空間がどのように変化したかを考察する。中世尾道では有力な寺社門前に複数の港湾が成立し、それに伴う町場が分散して立地していた。近世前期・中期には、そのような中世由来の港湾と町場が、山陽道に沿った町の拡大の中で、連続した市街地を成していた。しかし、このときまでの各港湾は、未だ機能分化が不徹底な中世的な港の性格を引き継いでいた。18世紀半ば以降に、沿岸の埋め立て地の開発が盛んに行われた。これらの埋め立て地では場所に応じて、問屋商業、商品取引、小型のはしけ船の停泊、造船といった廻船に関わる諸機能が分担されるようになった。近世尾道</p>			

の港湾が、廻船交通に適応した空間構造に再編されたと言える。このような港湾空間の再編にもなって、街道に面する商業地と港側に表を向ける家並みが分離するようになり、町場の形態も変化した。このように近世尾道では、全国規模の流通経済の発展の中で、時代に即した諸機能のゾーニングがなされたことで港湾空間が再編され、それに伴って町場の空間構造にも変化が生じたことを見出す。

第4章は、近世前期の幕藩権力による御蔵所の整備が、港湾と町場の空間に与えた影響を明らかにすることを目的に、広島藩の竹原下市・尾道・三津、三次藩の忠海、高松藩の宇多津といった瀬戸内海の港町の比較考察を行う。これらの港町では、中世由来の港が近世にも民間の商業港として機能し続けていたが、これらの商業港とは異なる場所に藩の御蔵所の専用港が新設され、一般商用港と領主用の港が明確に分離された。一方で御蔵所は、蔵の管理・運営と物資搬出入の労働力確保のために、人口密集地である中世由来の町場に隣接して設置されており、港湾のように旧来の空間との分離は見られなかった。ここから、幕藩権力は、領主米の保管・積出機能を担う御蔵所を既存の港町に近接させることで、その円滑な経営を行いながら、港湾については一般商用港とは区別して藩米の専用港を新設し、米流通を管理するという整備を行ったと結論づける。

第5章では、越前三国湊を事例として、近世福井藩の港湾整備によって、町場の立地と形態がどのように変化したか、地形・交通環境、所領の分布といった観点も入れながら考察する。九頭竜川河口に位置する三国湊では、近世に土砂堆積が進み、上流部の港は機能を低下させていた。そこで福井藩は、衰退していた旧来の港を年貢米輸送の拠点港として再開発した。同時に下流側の未開発地には、港湾と町場を新設して、廻船との商品取引を行う商業港を振興した。このような福井藩の積極的な水際開発の背景として、河口部に複数の藩領が分立し、他藩領の港町との競争が生じたことを挙げている。

終章では、残された課題の提示とともに、中近世都市史や港町研究への貢献として、港湾に関連する諸機能（船着・搬出入・商品取引・保管・管理・造船など）が集積する場を港湾として捉え、それと町場との空間的関係を論じる視点を新たに提示したことを主張する。また、港湾の機能分化に政治権力が関与したことを解明し、流通経済史の視点で論じられる傾向にある港町を、政治史的視点から再検討する可能性を拓いたことも、本研究の成果として挙げている。

(論文審査の結果の要旨)

中近世日本の港町（港湾都市）に関する研究は、歴史学・考古学・建築史学・地理学などの学際研究において進展した。しかしながら、中近世日本の都市研究の主流である城下町研究に比べると、港町の研究は少ない。当該期港町の空間構造を理解するための研究の枠組みや分析視角についても、統一的な見解は得られていない学問状況にある。そのような中で、政治都市である城下町との対比軸に置かれがちな港町は、流通経済都市としての性格が強調され、その空間的特質についても、有力な廻船問屋の屋敷や、雁木・常夜灯等が設置された一部の船着場の景観に代表される傾向にある。とりわけ港町の経済力の源泉たる港湾について、その空間の内実や機能の検討は不十分であった。このような状況に対して本論文は、中近世の港湾業務や役割に伴う諸機能（船着・物資の搬出入・商品取引・保管・管理・造船など）が集積する場として港湾空間の実態を把握し、港湾空間が商職人の町屋が立ち並ぶ町場空間とどのような関連があったのかを問うことで、中近世港町の空間構造の解明を目指す、意欲的で独創的な論考である。

このような高い目標設定が掛け声に終わらず、内実を伴うものであることは、本研究の事例研究によって例証される。本研究の目標は、当該期の港町を構成していた諸要素の位置と形態を地図化する景観復原図の作成によって、はじめて実現されるものである。本研究の各章の事例研究では、対象地における中近世の文献史料はもちろん、近世地誌、検地帳、絵図、近代地籍図、地形図といった多様な資史料を網羅的に収集し、史料批判を行ったうえで、それらを総合して分析する。そして、各施設の位置・形態や存続時期、機能・役割、周辺環境に関する情報を整理し、諸施設や道路、旧地形等を地図上に比定して、景観復原図を作成している。とりわけ屋敷地一筆レベルの地割スケールでの港湾・町場の空間形態の精緻な復原が本研究の特長である。実証的な景観復原図に基づいて考察を進める手堅い手法は、地理学のみならず、学際研究においても高く評価されるものである。

本研究の事例研究はいずれも説得的であるが、特に近世尾道の事例において、港町の景観を写實的に描く屏風図を分析に巧妙に活用している点は注目される。都市の平面形態を描く絵図・地図資料とは異なり、屏風図は港湾と町場を舞台とした多様な主体の生業や活動の様態を描出している。本研究は屏風図を史料とすることで、近世尾道の港湾にどのような施設が存在したのかだけでなく、各施設を誰が（属性・身分・職業・集団など）、どのように（場所・方法・目的・行為・周辺状況など）利用していたのかを明らかにした。また、同じ近世尾道の事例では、検地帳や地籍図から復原した土地一筆ごとの地割形態をパターンで分類し、他史料と組み合わせ、それぞれ

の地区の開発目的や特徴を見出すことにも成功している。このような考察は、「形態から機能を読む」歴史地理学の読図を発展させた分析であり、論証の説得力を高めると同時に、歴史地理学の分析方法の有用性を学際研究の中で示すことにも貢献している。

また、中近世の政治・流通・経済・社会的文脈の中に、長期的な港町の空間変化とその意味を位置づけようとする動的な研究視角も本研究の特長である。港町を取り巻く社会は、幕藩制的市場経済の確立、廻船問屋の台頭、御用商人から新興商人への有力層の転換、藩の流通保護や管理強化のように、目まぐるしく変化した。港町の空間構造がそのような変化の中で、いかに変遷を遂げたのかを考察する尾道や三国湊の事例研究は、港町をめぐる政治権力と商業・流通資本との関係史に接続する可能性も示している。

本研究は、中世の鹿児島、近世の尾道、中近世の三国湊、近世前期の瀬戸内海の複数の年貢積出港という、時期・期間、史料状況、地域が異なる複数の対象地の事例研究によって構成されている。いずれも精緻な景観復原による事例研究であるが、個別事例の知見に終わることなく、それらを通じて、港町の空間研究の視角構築を図ろうとする申請者の高い意欲が表れている。一方で、港町の地域性や規模・立地による分類に応じて、事例の位置づけを明確化していくことも重要である。港町は、陸域と水域の接点にあって、自然環境の変化が生じやすく、所有関係が不明瞭な水辺空間に立地する都市である。さらに、港町は海からの視点で立地と機能が決まる場合も多い。このような港町特有の地理条件を考慮に入れることで、他の学問分野とは異なる地理学的な視点による港町の空間史を発展させる可能性が拓けるだろう。今後の取り組みに期待したい。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降